

我が国電気事業の創始者

矢嶋作郎略伝 補遺

会員 田村悌夫

平成十八年十二月発行の『下松地方史研究』第四十三輯に「矢嶋作郎略伝」を発表した。

翌十九年二月、下松地方史研究会で「下松と矢嶋の關係」を、つづいて同年九月、徳山地方郷土史研究会で「徳山と矢嶋の關係」を中心に報告したが、その後資料の発見や提供等があり、既発表の「矢嶋作郎略伝」の補足をしておきたい。

一、生家・伊藤家

①生家・伊藤家

矢嶋作郎は天保十年（一八

三九）一月に徳山藩士伊藤三郎治の次男として、現周南市上御弓町に生まれた。幼名を泰之進と言ひ、伊藤虎雄、駿馬は作郎の甥にあたる。

伊藤家は徳山藩出頭（家老に次ぐ地位）・禄高貳百五十石森孫次郎組の一員で、禄高は貳十五石であった。

作郎の生まれた天保十年という年は、毛利藩が質素儉約令を出した年で、翌年から村田清風により財政改革が始まり、ペリー来航十四年前であった。作郎は幼年時代から和漢の学問を修め成長するが、歌が大変好きであった。

②徳山藩士時代



矢嶋作郎

欧米列強の接近に際し、国内が開国か攘夷かに明け暮れる中、嘉永六年（一八五三）のペリーの来航は、太平の眠りを覚ませた。国内は驚嘆し、人心の動揺は隠しようもなかったが、こういう幕末の状況のもとで作郎は、徳山藩の中で遠藤貞一郎や大野直輔らと気脈をつうじ正義派（改革派）に属し、勤王の志士として活躍し討幕に尽力する。

同じ正義派でも河田佳蔵、児玉次郎彦、本城清、江村彦之進、浅見安之丞、信田作太夫、井上唯一ら七人は、俗論派（保守派）の富山源次郎一派により殉難し、後に「徳山七士碑」として児玉神社に祀られているが、作郎が徳山殉難七士のような難を逃れたのは、彼が幕府に捕らえられて「板倉藩」に三年間幽閉されていたからだと言われる。いっどこで捕らえられたかは不明。

板倉藩というのは、当時幕閣の首座にあった老中板倉勝静が藩主の備中五万石松山藩（後に伊豫松山藩との混同を避けるため高梁藩と改名）のことである。

二、英国留学

① 矢嶋姓の誕生

明治元年（一八六八）三月、作郎は徳山藩の毛利元功公の英国留学の学友・補佐役として英国に渡航する。元功公一八歳、作郎三〇歳であった。留学先のロンドンでは経済学、銀行業務、電気事業等を学ぶ。

既に長州では文久三年（一八六三）に伊藤博文、井上馨、井上勝、山尾庸三、遠藤謹助の五名が「長州ファイブ」として英国に密航していたが、作郎らの留学は密航ではなく、正式の留学であった。

この留学時、作郎は伊藤家より分家し、当初は日本のことを意味する「八州」姓を名乗るが、後に「矢嶋」姓に改名した。「矢嶋家」が誕生したのである。

② ゲルマン紙幣

留学中の明治五年（一八七二）一月十七日、矢嶋は日本の新政府が紙幣をドイツのフランクフルトのピー・ドンドルフ・ナウマン社で製造するとき、新紙幣製造監督を拝命し、日本の総代理としてその監督にあたった。こ

れは明治新政府が偽札防止のため、印刷水準の高いドイツで新札を作ろうとしたものである。

ナウマン社の担当技師は、エドワルド・キヨツソーネというイタリア人の彫刻師であった。この日本最初の紙幣は、ドイツで作られたので「ゲルマン紙幣」と呼ばれた。このとき矢嶋は三十三歳であった。

新政府はゲルマン紙幣を、当時の金額で約五千万円を二度にわたり日本へ運んでいるが、マラッカ海峡を通り、日本へ運ぶことは大変危険なことであった。このため矢嶋は紙幣の主要部分をドイツで印刷し、日本に到着してから中央白紙部分に「明治通宝」の朱文字を入れ、また新札左肩に「出納頭」の割り印をするようにしたのである。つまり半製品にして運んだわけであるが、後にこれでは国威にかかわるといふことになり、矢嶋帰国後の明治十年（一八七七）から印刷機械を買い入れて日本で印刷するようになった。

明治七年（一八七四）三月二十七日、六年間のロンドン留学を終え帰国。直ちに大蔵省に入り、四月十日、補

紙幣寮七等出仕となる。同年五月七日、紙幣寮（現印刷局）工場長に任命され、同月大坂大蔵省出張紙幣助（紙幣担当官）という辞令ももらっている。

矢嶋は在欧中実見した英・独二国の諸工場の模範を折衷取捨した一階を舎密局、二階を彫刻局、三階を刷版局とした近代的な工場を造った。当時三十五歳。

この時、ドイツでゲルマン紙幣を製造したイタリア人技師キヨツソーネを、お雇い外国人として、月給一〇〇英ポンド（日本円で四百五十円）で招聘した。

また、矢嶋は紙幣だけでなく手彫竜切手、手彫桜切手以降の切手の印刷製造にも力を尽くし、その印刷製造過程を記録した「矢嶋作郎ノート」は、大蔵省（現財務省）印刷局記念館に陳列されている。

翌八年（一八七五）二月、紙幣・切手・軍票等の印刷技術の功績に対し「従六位」に叙せられた。

③オルゴール

ロンドン留学中に矢嶋は元功公とスイスのジュネーブを訪れ、オルゴールメーカーのピカード社に特別注文で

オルゴールの製作を依頼している。そのオルゴールには明治維新の際、官軍が太鼓を叩いて行進した「宮さん宮さんお馬の前で・・・」で始まる「トコトンヤレ節」など四曲を入れている。このオルゴールは現在も毛利家に伝えられているが、東京の矢嶋家にもある。

これは国内では最も古いもの一つで、日本歌謡史上大変貴重なものである。

三、彫刻師キヨツソーネ

①果たした役割

明治新政府は、「西欧文化に追いつき追い越せ」を旗印に産業、軍事、教育、芸術などの各分野にわたり、その近代化のために、外国から専門家を招き指導を受けた。そして多くの「お雇い外国人」が、明治の文明開化や産業技術等の近代化に貢献した。

その中で矢嶋が帰国後入った大蔵省紙幣寮（印刷局）では、紙幣製造の国産化政策にそって矢嶋の推薦により、イタリア人のエドワルド・キヨツソーネを招き、新しい

凹版彫刻・製版技術を学び、日本の紙幣製造技術を一気に世界的水準に高めることができたのである。

また、キヨツソーネは肖像画制作にも卓越した才能を発揮して、明治天皇をはじめとして、明治の元勳等の肖像画を制作し、宮廷画家としても活躍した。

特に顔の半分上を実弟西郷従道、下半分を従兄弟の大山巖からとり、二人をくつつけて制作した西郷隆盛の肖像画は有名である。

当時、まだ日本では近代的な製版、印刷技術はなく、キヨツソーネが来日し、紙幣寮での紙幣原版の製造や肖像画制作等を通じて、新しい製版法や凹版彫刻、印刷技術を伝授した。その功績は紙幣寮内に止まらず、わが国の印刷界全体に及び、当時の印刷文化に大きく貢献した。

②キヨツソーネの略歴

一八三三年

イタリアのジェノヴァ近郊・アレンツァーノに生まれる。

一八五五（二二）

ジェノヴァ市アカデミア・リグステイカ美術学校卒業。特別賞受賞。

一八六八(三五) イタリア王国国立銀行からドイツのフランクフルトのドンドルフ・ナウマン社に派遣される。

一八七〇(三七) ドンドルフ・ナウマン社で「新紙幣」

(ゲルマン紙幣)の彫刻に従事。

(我が国に紙幣寮が設置される。)

一八七五(四二) 紙幣寮に彫刻師として雇用。

一八七七(四四) 「交換銀行紙幣(国立銀行紙幣・新券)

一円券」(水兵札)制作。

一八七八(四五) 「改造紙幣・一円券」(神功皇后札)制作。

一八九一(五八) 印刷局を退職。勲三等瑞宝章受章。

一八九八(六五) 東京麹町区平河町の自宅で逝去。



来日当時のキヨッソーネ

四、東京電燈會社設立

①東京電燈會社設立とその

後

明治十年(一八七七)、矢嶋

は実業界に転身を決意して大蔵省をやめ、東京貯蓄銀行を創設した。また大阪三軒屋紡績會社の設立発起人の一人になっている。

明治十四年(一八八一)、工部大学校(後の東大工学部)

のイギリスから招聘されていたエルトン教授とその学生の藤岡市助(岩国出身)らは、卒業前後頃から海外の雑誌により海外では電燈が広く一般に実用化されていることを知り、我が国にも電燈會社の設立を提唱した。しかしいずれの実業家も事業の将来性に危惧の念を抱いたが、当時東京貯蓄銀行頭取であった矢嶋作郎だけは、取り組んでみようと同向きを志を示した。

我が国の電気事業の貴重な芽生えは、まさに工部大学校のイギリス人教授とその学生たちの新知識と矢嶋作郎の先見の明により培われたものであった。

当初の資本金は二十万円で創立願を出しているが、発起人として矢嶋の外に大倉組大倉喜八郎、横浜正金銀行原六郎、三井物産益田孝等の名前が記載されている。

エジソンが炭素線電球(白熱電球)を発明したのは、

明治十二年（一八七九）十月二十一日である。その三年後の明治十五年（一八八二）十一月一日、日本でも矢嶋作郎の東京電燈會社のデモンストレーションとして、東京銀座の大倉組内の東京電燈會社仮事務所前で、二千燭光のアーク灯（弧光灯）が点灯された。

日本最初のこの電灯公開に市民は驚嘆し、毎夜あちこちから「文明の光」を見に押し寄せた。これにより募集中の資本金も一挙に集まった。

東京電燈會社はそれから四年後の明治十九年（一八八六）に藤岡市助を技師長に迎え営業開始、翌二十年（一八八七）から市内配電を行った。

因に周南地区を管轄する広島電燈會社は、明治二十七年（一八九四）に設立されているので、当地区配電は多分大正年代に入ってからだと推察される。

東京電燈會社は設備拡張に伴う増資や競合會社の合併等を重ねながら順調に発展しつつあったが、明治二十三年（一八九〇）、屋台骨を揺るがすような一大事が発生した。それは帝国議事堂の漏電による焼失事件である。こ

の漏電による焼失という事態は、まず皇居をはじめとする皇族方に不安をまおり、電氣の契約の解約がはじまり、その流れは一般市民にも広がっていった。

結局当該事件の責任をとって明治二十四年（一八九二）二月、矢嶋社長以下役員は総辞職することになったのである。しかし東京電燈會社はその後信用を回復し、今日の東京電力㈱に発展するのである。

②電氣記念日の由来

毎年三月二十五日は、電氣記念日であるが、その由来と東京電燈會社との関係について記述する。

明治十一年（一八七八）三月二十五日、工部省電信局は、万国電信連合に加盟する準備として東京・木挽町に電信中央局を設け、その開局祝賀会を東京・虎ノ門にあった工部大学校で開催した。

当日、会場に電氣灯をともしよう工部卿伊藤博文から命ぜられていたエルトン教授は、グローブ電池五〇個を使い、講堂の天井に設置されたアーク灯（デュボスク式アーク灯）を点灯させるため一生懸命であった。

やがて六時、エルトン教授の合図とともに、目もくらむような青白い光がほとばしり、講堂をくまなく照らし出した。その場にいた大臣や各国公使など百五十人を越える来賓は、「不夜城に遊ぶ思い」と驚きの声をあげた。これが日本で電灯が公の場ではじめて点灯された瞬間であつた。

既述のごとく明治十二年十月二十一日に米国でエジソンが白熱電球を発明し、日本にも輸入された。明治十五年十一月に矢嶋作郎の東京電燈會社が銀座に街灯を点灯したが、この時は電池ではなく、米国製のブラッシュュ電機を用い、二千燭光のアーク灯が使われた。

動力への利用は電灯より少し遅れ、明治二十三年十一月、東京・浅草の十二階のエレベーター運転用として、七馬力電動機に供給されたのが初めてで、二十八年（一八九五）二月には、京都伏見線で電気鉄道が初めて営業運転を行っている。

このように電気の活用が広まるにつれ、日本にはじめて電気が灯った日である三月二十五日を記念するため、

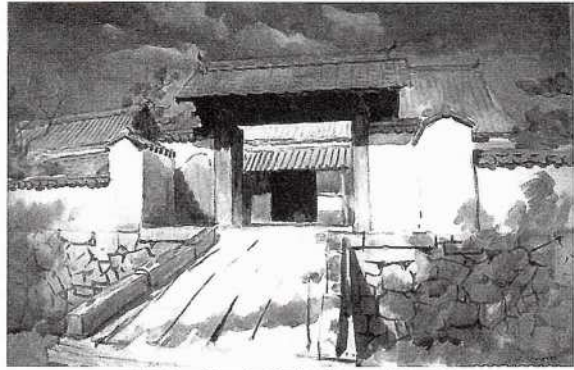
昭和二年に開催された日本電気協会の総会において「電気記念日」が定められたのである。

五、晩年の矢嶋作郎

矢嶋作郎は東京電燈會社社長を退任後、住居を下松の宮の洲に移した。これは江戸時代、徳山藩の藩札を徳山・野村の土井屋新蔵とともに発行していた藩用達町人の宮洲屋磯部幸吉が幕末に没落したので、矢嶋はその資産を一旦引き受けた毛利元功公より、明治二十一年（一八八八）六月に邸宅とともに塩田事業等全てのものを買い受け引き継いだのである。

磯部家のあつた宮の洲は、周防の天の橋立と呼ばれるほどの景勝の地で、三角縁神獸鏡二面を含む四面の漢式鏡がでた宮の洲古墳があるとある。その古墳の裾近いところに、東側に堀と高石垣とを巡らし、西側は大谷川に面し、前は入江という周囲の中にお城のような構えの矢嶋邸があつたのである。

屋敷跡は現在東洋鋼鋸(株)下松工場の一角となつてい



下松宮の洲の矢嶋邸 (絵・小林画伯)

て、表門のあった北側は県道徳山下松線に面している。

西門の前には、豊臣秀吉が大坂城築城の際、毛利輝元が寄贈した毛利家の略称の一つ星

を刻した巨大な大津島産の御影石の残石が一基(大)

安置され、もう一

基(小)は客間の庭に置かれていた。現在この残石は大は日立乗越寮の庭に、小の方は運ぶとき中を刳り貫かれたものが山口博物館の庭に展示されている。

広大な松林のある庭内には、前の海から海水が入る大きな海水の池があり、客人があるとその池に船を浮かべ

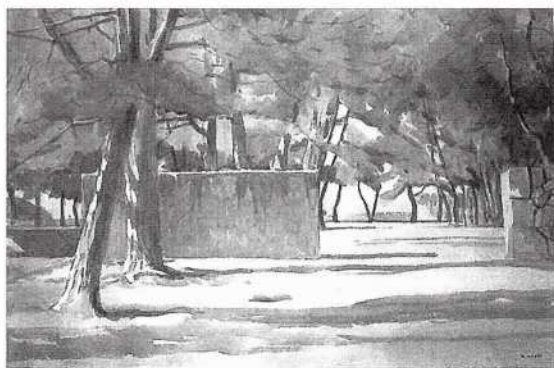
て魚釣りをして楽しんでた。これは庭園ではなく、林泉であった。(木立や池や小川などがある庭園のことを「林泉」という。)

矢嶋邸の面積は約二千八百坪であったが、当時の矢嶋家所有の地所は塩田を中心に約二十万坪で、その中の塩田約十萬坪が、日立製作所へ五萬坪、東洋鋼鋸へ三萬五千坪、日本石油へ一萬五千坪程度、作郎の娘婿専平の時に久原房之助により分譲され、今日の下松工業地帯となったのである。

矢嶋家は本宅以外にも下松、徳山、静岡、宮島、桜島に別荘を持っていた。

晩年、矢嶋作郎は本宅で明月會という歌の會を月に一度開催し、悠々自適の生活をおくっていたが、旧徳山藩士であった作郎は、徳山とも縁のあったかつての同志で勤王の歌人中山三屋女を称えるため、彼女の歌集『浮木うきぎのかみ』を彼女の三十三回忌の明治四十年(一九〇七)に自費で出版している。

そのままにしておけば世間から忘れられてしまうもの



矢嶋邸内の大坂城残石（絵・小林画伯）

る。

矢嶋作郎の一生は「長州藩の志士」であったと考える。生前矢嶋作郎は歌集『桂露』を残しているが、没後嗣子専平により『桂城集』が刊行された。

明治四十四年（一九一）十一月七日逝去。行年七十
三歳。

を、歌集を出版す

ることによって郷

土の歴史に中山三

屋女の名をとどめ

た功績は大きいと

評価されている。

三屋女の父は明

治天皇の外祖父の

中山大納言忠能

で、幕末には勤王

派として薩長に大

なる協力をしてい

辞世の歌

青柳のうらすすしくもなりにけり

笠戸のしまにゆふ日かくれて

桂城

参考資料

キョツソーネ特別展目録 久米重治 一九九八年



遠石八幡宮にある矢嶋作郎寄贈の石灯籠

